

拝啓 陽春、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

私儀

長い間お世話になっておりました手打診療所ですが、3月末日をもって退職いたしました。昭和53年以来39年間、皆様にはいつも温かいご支援を賜り、お陰様で楽しく有意義な日々を送ることができました。心からの感謝と御礼を申し上げます。

そもそも私が手打診療所にお世話になりましたのは昭和53年、開業までの半年の約束でした。しかし、約束の半年はあっという間に過ぎてしまいます。当時は今以上の医師不足時代で、辞めても後任が見つからず、簡単には引き揚げられなくなっていました。

当初は子供からお年寄りまで何でもありの離島医療の厳しさに戸惑いました。小児科や精神科など、本を開き専門医に相談しながら手探りでやってきたものです。また、期待された救急医療も麻酔器すらない状態で救急整備から始めなければなりませんでした。

ところが、まるで外科医の到着を待っていたように急患が飛び込んできます。骨盤骨折に内臓破裂、胃や十二指腸の穿孔、それに子宮外妊娠に帝王切開など緊急手術が続きました。

なかでも思い出に残るのは腹部大動脈瘤の手術です。破裂寸前で大学病院にヘリコプター搬送しようとしたのですが、昔、頸椎損傷で大学に3年も入院したことがある患者さんで、もうどこへも行かないから島でやってくれと言われました。しかし、見たこともない手術で、できるはずがありません。当然、お断りしたのですが、手術できなくてそのまま死んでもそれこそ寿命、誰も恨みません。また島で挑戦してもらって、それで死んでも本望と言われて決意。ご期待に応えるべく大学の竹之下満先生に相談。二人で手術しました。手術は、離島の小さな診療所では考えられないような大手術でしたが見事に成功しました。

振り返ってみますと、当時の下甕村は時代を先取りしていたように思います。医療整備に努めながら老人パラダイス構想なるものを唱え、いち早く高齢対策にも取り組んでいました。当時、離島や僻地の診療所で言われていたことは、必要な物は何でも買ってやりたい、でも使いこなす若い医師が来てくれないし、来てもすぐに帰ってしまう。だから買えないというものでした。

しかし、下甕村は違いました。胃カメラや超音波、レントゲンTVなど必要なものは何でも揃えてもらえました。昭和61年には診療所を新築移転し、看護師の定員を増やし、平成2年には人工透析を開始しました。更に平成8年にはCTが入りましたが、離島の小さな診療所では画期的なことだったと思います。

島にお世話になって39年、島がご縁で多くの人たちと出会い、人の輪が広がり、自分たちの人生も豊かになったように思います。我が愛する甕島は決して沈むことのない偉大なる島です。この島は自分たちの3人の子供たちが生まれ育った島でもあり、この島に繋がれているという安心感。つまり、この島に繋がれているということは将来に我がアイデンティティーそのものだったのではないかと感じております。

地域医療は、一口で言えば出会いと別れでしょうか、これまで見送る側から多くの人たちと別れてきましたが、いつかはもやいを解いて見送られる日が来る、そう家族にも言い聞かせながら覚悟していました。そして、もやいを解いて三週間余り、肩の荷が下りた感じですが、その一方で、軽い眩暈を覚えるのは島酔いが残っているのかも知れません。

医師としては未熟のまま、皆様のご期待に応えきれないところも多かったと思いますが、ご海容の程お願い申し上げます。

幸に後任には鹿児島大学第一外科の後輩で経験豊富な内村龍一郎先生が赴任されました。変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら甑島の発展を願い、島の皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念し、お別れのご挨拶といたします。

この ML の皆様にも長い間ご指導いただきありがとうございました。